

福沢諭吉の思想の遷移

「蝶の雑記帳 133」

池田浩士という人の著書『福沢諭吉 幻の国日本の創生』（人文書院、2024年）を読んだ。日曜日の新聞の主要なコラムに目にとまるといふ希なことが起きたからである。福沢諭吉の「脱亜論」のことは聞いていたけれども、コラムを書いた論説者が単なる「脱亜論」に納まりきれない面があると言っている。読んでみようという気を起こした。

軽量ではない書物を読み進むと内容も充実していて、最近めずらしいしっかりした研究に取り組んで出来上がったものだと判る。福沢の社会と政治に関連する著作を取り上げ、重要な論述部分を一つひとつ引用しながら時々思想の要点をたどって、福沢の思想が変化したところと基底にある考え方を明らかにしていく。

こういう思考の態度を見習いたいものだ。著者は1940年生まれという。かなり大部のこの書物を書いたとき83歳！わずかにまねごとをしている5歳下の凡夫を叱咤する。

今回この著作から学んだことは日本の近代思想にかかわり、雑記帳131番目の思索に関連する。そこでは、渡辺浩著『日本政治思想史』に出て近代思想家に分類できる二人のうち中江兆民のことを考えた。その書物はもう一人の福沢諭吉のことを思索するきっかけを与えてくれなかった。日本の近代をリードした福沢についてわたしの知らなかったことを

教えてくれなかったからである。

こんど知ったのは、一般に語られる福沢の「脱亜論」という呼び方が、主張の核心をとらえそこねて穏便に向かわせるということだった。「脱亜」という言葉は、極東に位置する日本が遅れて近代に参入するためにアジア的な状態を抜け出さなければならないと呼びかけているように聞こえる。その言葉だけに注目していると、福沢の「脱亜論」が19世紀後期の世界情勢のなかで日本がとるべきもっと強い行動を提唱したことを見逃してしまう。

池田浩士の著書は、日清戦争の勝利が見えたとき福沢が説いたのは台湾を割譲させることだったことを教える。しかも、戦争後に台湾の領有が決まると、台湾領有の意義について論じた。その文には、「いずれも御しがたき蛮民共にして…」というような言葉まである。植民地を支配する利益として、「太平無事は軍人を腐敗せしむる…、今回の戦争はこの点において願うてもなき事なりし…」、「台湾の兵事はあたかも永久に軍気を維持するの好機会を与えたるものに異ならず…」と。また、「台湾経営の大方針は、ただその土地を目的として、島民の有無は眼中に置くべからず」、「反抗の形迹を顕わしたる輩は一人も残さず誅殺して…」と書いている。そして、「兵馬の戦に勝つのはまた商売の戦に勝つべし」と、近代資本主義時代の文明国のあり方をよく把握して、日本も同様の方向に進むべきことを述べている。

福沢は発刊した「時事新報」の社説でつぎつぎに論じていった。1882年にすでに「朝鮮政略」を論じ、日清戦争の始まった1884年の「東洋のポーランド」では、ロシア・オーストリア・プロイセンの三国がポーランドを分割したことを例に挙げて、「支那帝国分割の図」まで示して列強による東アジア侵略の情勢を説いた。引用するときりがないが、福沢諭吉は、言論界で、レーニンの名づけた帝国主義時代に対応する一人のイデオログとして発言している。

1900年までの近代日本の歴史をふりかえって遠望すれば、福沢諭吉が自らの新聞でまたそれを書物にして発言したことは、同時代の主流の実践家である政治家と官僚・実業家・言論家たちがリードした思潮とほぼ同じだと見える。福沢諭吉はその思潮の中央にいて掉さしたと言える。幕末から明治初期にかけて率先して欧米の文明を紹介し文明開化の先頭に立った人は、彼の生きた時代のあいだ先導者と見えていただろう、学校を開き多数の若者の教育に尽くした教育者、また新聞を発行して発言を続ける優れた言論家、著作を出版し続けてあいかかわらず耳を傾けるべき思想家として。しかし、100年以上前のこの人を歴史上の人物として考察した池田浩士の著書は、おさえた冷静な書き方をしているが、その実践家が時代の流れのなかでずいぶん負の側面をもったイデオログだったことを明かした、とわたしは受けとめる。

福沢は1901年に亡くなっているなのでその帝国主義的な言説はあまり知られていないのだが、彼の思想は、日露戦争か

ら日中戦争を含める長い期間で見ても、植民地獲得をめざす軍国主義の思潮を誘導するのに力があつた、と考えることができる。その時代には、政治を主導する政治家・官僚・実業家・言論家・軍人だけでなく、『学問のすすめ』を読み「天は人の上に人をつくらず…」という言葉に感動して福沢に敬意を抱いて影響を受けた多くの人々がいただろうから。

そう考えると、歴史を俯瞰図として語る司馬遼太郎の歴史小説と随筆の瑕疵が見えてくる。池田浩士の議論の証拠となる事柄を綿密に資料に探る研究手法が、一人の代表的な思想家の言説に同伴した同時代史を明るみに出して、司馬史観を批判する。司馬遼太郎は、日露戦争の講和条約締結の時期に起きた日比谷焼き討ち事件から世論が変化したとして、日清・日露戦争とその後の中国侵略・日中戦争への道程とのあいだに線を引く。だが、上で見たように、日清戦争の前からすでに、最も見識ある人と見られていた福沢の思想に、20世紀までつながる帝国主義的考え方があつたのである。

わたしは以前から司馬史観に疑問をもっていたが、池田浩士の著書が司馬遼太郎のような切れ目を入れることができないことをはっきりと明らかにしている。150年間を眺める俯瞰図で、大きな政治の流れを区切る切れ目はないのである。人間の社会の精神・思想の流れに明確な節目を入れることはもともと困難である。もちろん、新しい大きな思想の波頭を認めることはできるだろう。しかし、異なる思想が対立しな

がらの時間的な運動は位相差をともなう波動的なものである。近代資本主義時代に興隆した日本の政治的な運動はとても大きなうねりで、どこでその動きが変化したかを見究めることはむずかしい。

福沢諭吉はそのうねりの前半期でほとんど波頭の上に立っていた。しかし、人間は歴史の前方を見つめて立っているのではない。うしろ向きに立って動きを見ている。歴史のうねりがどの方向に向かうかはっきりと理解することは、福沢諭吉のように明晰で知的な人にもできなかつただろう。

*

ところで、池田の研究は、福沢の政治思想の変化がもっと以前の基礎的な思想上の遷移に始まることを明らかにしている。近代国家として歩み出した日本が西洋列強に圧倒される危機を感じた福沢は、学びの先に「国の富強の^{もと}基なれ」という言葉を加える。『学問のすすめ』もよく見れば、それ以前の学ぶ者を主体として位置づける基本理念が消えて、純然たる教えの文体に変化している、と池田は指摘する。時代の歩みによって追い立てられる啓蒙家に変貌していた、と。

最初期の『西洋事情』では、依拠した原典が職業に貴賤があるとする見方を不必要としていたのを、福沢は、自分の言葉でさらに力説した。ところが、政治情勢の推移するなかで、その動向を主導しようとする実際家の福沢に、初期に説いていた天賦人權論の理念が薄れていった。自由民権運動で沸騰

する状況を鎮静するのに、この運動の主体は士族であるべきことを説きはじめる。『時事小言』では、「士族の血統を保存せんと欲する」と言って、「天の上に人をつくらず…」と説いたのとは反対の観点が打ち出される。この時代に流行し始めた優生学に影響された考えまで口にする。

福沢の思想は遷移したとすることができる。『通俗国権論』では、「一人の人間が安全無事に生きていくためにも、理想社会とは程遠い禽獣世界さながらのこの社会にあっては、最後には道二つ、殺すか殺されるかである、…、万国交際の道またこれと違いはない」と述べる。ここから「外戦止むを得ざること」という考えに進み、「一国の人心を興起して全体を感動せしむるのは外戦にしくものなし」と言明する。まさしくその時代の趨勢である帝国主義に掉さすことを提唱していて、上で見た主張に進むのは明らかである。

ここで、池田浩士の論述を現代にまで延長して考えると、福沢の思想全体のなかに一つの課題が潜んでいたことに気づく。それは、日本という国のあり方に関連して、日本の政治において天皇の存在に意味があると論じた点である。福沢の位置づけは、主権在民になった戦後の天皇制でもそれを支える理論とすることができる。しかし、その議論は上で見た福沢の政治思想の一部としてあったことを忘れてはいけな
いだろう。長い歴史をふりかえると、国のあり方についての
こういう考え方をあいまいなままにしておくと、激動する時

代に時として思わぬ形で利用する者が出ることもある。現在、皇位継承の問題が議論されようとしているが、戦後の天皇制に真摯に正対して普遍性に開かれた共通理解をつくりださなければ、21世紀に問題を引き起こす要因になるかもしれない、とわたしは懸念する。

* *

さて、この考察は急ぎすぎていて、要約がうまく出来ていないし不十分だと思うが、思索を次の疑問に進めよう。わたしが残念でもあり不思議に思うのは、灯台のように幕末維新の人々に進路を照らし出した福沢諭吉が、なぜその思想をそのように旋回していったかということである。

この問いに、渡辺浩著『日本政治思想史』について雑記帳131で考えたことがつながる、と思う。渡辺の著書は、池田浩士が福沢の思想全体を考察した点では及ばないけれども、近世以来の日本の思想のなかに置いて福沢諭吉と中江兆民の思想を比較するのに役立つ。その比較は、上の問いに一つの手がかりを与えてくれる。鍵となるのは中江の「わが日本いにしえ古より今に至るまで哲学なし」という言葉だと思う。福沢は実学の観点から欧米思想を学んだのに対し、同じく実践家である中江は欧米思想をもう少し広い視野で学んだのだと考えることができる。

またわたしは、青年期の福沢と中江の思想の基底と考え方に差異があったように推測する。二人の文章を読んで分かる

ことがある。福沢の時事に関する論説は当時の人々の常識的な言葉を用いているが、その文章には青年期になるまでの学問の素養があまりにじみ出ていないように感じる。それに対し中江は、晩年の『一年有半・続一年有半』でヨーロッパ思想を考えると、青年期になるまでに修得したことを基礎にして哲学的なことも自分なりの言葉で表現している。思想を本当に自己のものとしていたとすることができるだろう。

ここには、江戸時代の教育における朱子学を受容の問題があるのではないかと思う。蝶の雑記帳131でも触れたように、朱子学には普遍性を求める思考があった。朱子学には、それを学ぶ少年たちを普遍的な思考に導く力がある。

けれども、機敏な知性の持ち主である福沢諭吉という人に、儒学全体のなかに収められた朱子学の抽象的な思考が響くことが少なかったのだろうか。実学をめざす福沢は早い時期から蘭学・英学を学んで、抽象的な思考を鍛える機会が少なかったのだろうか。だから、初期の福沢が欧米思想を紹介しそれを唱道するとき、自分の思考の基底にあって働く素養が一体となつてつくり上げられる思想にまで高められなかったのだろうか。

もし老蝶の推測が少しでも当てはまれば、時代に向き合つて自分の中から独自の論説を組み立てようとする福沢に、基底にある基本の思想と考え方が十分よく働くことが妨げられた、と推測することができるだろう。

それに対して、まだ少年だった中江兆民はきっと真面目に朱子学を学び、その「性・理」の学を自分のものにしようと努力した、と推測できる。中江も若くしてフランス語を学習する機会を与えられたが、朱子学の学習は身について死を前にした書き物にまで影響を残すほどだった、と考えることができる。

しかし、福沢諭吉と中江兆民の思想の差異は、個人的な資質素養と環境だけから来たのではない。1835年生まれの福沢と1847年生まれの中江との年齢差はそれほどないが、激動期となった幕末維新の時代に12年の差は決定的に重要だった、と考えられる。そして、福沢が蘭学・英学を学び有用な文献を読んだのは、もっぱら国内においてだった。15歳の中江は、1862年に開設されたばかりの藩校で学び始め、18歳で長崎に留学を命じられフランス語を学んだ。そのあとも江戸に出て学問に精出したらしい。1871年の新政府の米欧使節団で留学生に加えられたことが転機となった。福沢とちがって1874年に帰国するまでフランスに滞在し、中江の方がヨーロッパの学問を学ぶのによい環境を得たのだ。それがヨーロッパ思想を広く自己のものとする機会を与え、『一年有半・続一年有半』に現われているのだ。

簡略にこうくらべるだけで、中江と福沢の思想が異なるものになった理由の重要な部分を理解することができる。だからわれわれは、福沢の思想の発展が不十分だったことをただ

非難するだけではいけない。中江兆民の思想も時代の制約を受けていたことを忘れてはいけない。

それにしても近代日本で、福沢・中江の亡くなった1901年よりあとにも、1873年に亡くなったJ. S. ミルほどの思想家が現われることはなかった。欧米文化の厚みを思わざるをえない。このことも日本文化がいまだに抱えている条件と考えて、先人の苦勞を偲び自己の啓発に努めなければならない。老凡夫には、それを知るのが遅すぎたけれども。

2025年1月大寒

海蝶 谷川修

付記 2025年4月16日

4月に田中豊著『儒学者 兆民』（創元社）を読んだ。1993年生まれの子の博士論文に補論を加えた書物という。新しい視点を取り入れた優れた研究の書で、新聞書評に採りあげられたのもうなづける。教えられるところがあった。わずかに不満があるとすれば、兆民を「儒学者」と呼んだ点である。その呼称は誤りではない。しかし、朱熹は、孔子・孟子の儒学を大いに尊重しながら、新儒学と言えるほど体系化されたものにした。明・清～近代にかけて中国・日本で学ばれた儒学は朱熹の宋学だった。ルソーの『社会契約論』を論じた日・中の論者たちは、学んだその朱子学概念と体系とに基づいて考察した。だからそのことに留意するのがよい、と思う。